

車椅子対応の階段昇降の取り組みについて

～持ちつ、持たれつ精神～

施設名：介護老人保健施設 緑寿園 通所リハビリテーション

発表者：介護福祉士

赤嶺 昇

波平 恵

【はじめに】

当通所リハビリテーション緑寿園は、介護事業と予防事業の2事業所を併設。送迎車両は1日に13台を稼働し送迎業務を実施している。在宅生活を送られる要介護者にとって、通所などの外出機会を確保する事は、生活の質を維持・向上させるために重要であるが、エレベーターの無い2階以上に住む方にとって「階段昇降」は外出を阻む大きな要因である。その中でも利用者を車椅子に乗せた状態で階段昇降を行う「階段昇降介助」がある。車椅子を持ち上げる方法は完全な力任せ状態であり、持ち上げる事が可能な職員の限定など一部職員の負担になっていた為、今回新たな介助方法を検討し、負担軽減に改善できた事例を報告する。

【事例紹介】

T・K様、男性、80歳、体重62キロ、車椅子16.3キロ、合計78.3キロ、在宅3階で車椅子に乗せた状態で男性職員2名にて車椅子を持ち上げて3階より階段昇降を行う。併用のデイサービスとリスクマネジメントの観点から、過去担当者会議にて車椅子を持つ階段昇降介助のリスクを説明、住居の引っ越しや福祉用具の昇降機を検討するも自宅階段の構造から福祉用具の使用が難しく、現在の住居でのサービス状況を維持したいとの要望と、併用のデイサービスも現状介助のまま推進し現在に至る。

A) 男性職員2名にてお互いに車椅子のアームレストとフットレストを持ち上げて階段を昇降する方法。

B) 男性職員2名にてお互いに車椅子のアームレストとフットレストを持ち、前輪を浮かせた状態で1段ずつ階段を昇降する方法。

Bの方法にて階段を降りる介助は負担なく行えるも、階段を昇る介助の時は、アームレスト側の職員に負担が掛かりAの方法にて行っていた。

C) 男性職員2名にてお互いに車椅子のアームレストとフットレストを持つ際、アームレストを持つ

職員は進行方法に向かってアームレストを持ち前輪を浮かせた状態で1段ずつ階段を昇る新しい方法。

【考察】

Cの方法を職員に勉強会で伝達し、実際にCの方法で取り組んでアンケートを実施した。職員から「今までA方法で行っていたが、C方法が楽に行える」「階段昇降に関してのリスクは0ではないが、AとCがやりやすい」などの意見が聞かれた。

【まとめ】

Cの方法もリスクが完全に無くなったわけではないが、Cの方法により職員の負担改善には繋がった。

当事業所の指針である「住み慣れた地域、在宅で末永く生活が出来るよう支援する」をモットーに可能な限り出来る所まで「持ちつ・持たれつ」の精神で支援して行きたい。